

自閉症に対する育児支援

— 関係発達臨床の立場から —

小林 隆 児*

Abstract: Recently, as epitomized by the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF), development and disability have gained clear recognition as being the outcome of mutual interaction between the individual and the environment. However, child-rearing support for developmental disorders to date has primarily been attempts at promoting development or adjusting the environment as the result of multifarious evaluation capturing the disorders as impediments to development of the child's capabilities.

Following examination of the mutual interaction between the child (individual) and caregiver (environment) giving rise to the variegated problems pertaining to development seen in children today, we have been providing support focusing on the relationship between child and caregiver, which we call "support for relationship development".

Citing a number of concrete examples to illustrate problems in relationship arising between the child and caregiver, the following points are raised.

First of all, the ease with which caregivers resort to the dogmatic use of words in approaching children despite great deviation between the two in the way interest is focused on some object. Second, the ease with which disparity can arise between the dual mentality of dependence and independence present in both the child and caregiver. As a result, caregivers may push a child towards independence just when the child is wishing for dependence, or alternatively, may make excessive approaches to involve a child when the child wishes to be alone.

Such divergence in communication cannot be minimalized simply as a problem with the caregiver's child-rearing methods, as it is believed to arise from things such as the

Supporting Child-rearing of Children with Autism
— from the Clinical Viewpoint of Relationship Development —

* 東海大学健康科学部社会福祉学科

(〒259-1193 神奈川県伊勢原市望屋台)

Ryuji Kobayashi: Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai, Isehara, Kanagawa, 259-1193, Japan

structure of communication per se or the dual nature (ambiguity) of mankind. Moreover, this divergence in communication is expected to become a large factor giving rise to serious problems later on affecting the child's overall mental development including the development of language cognition, illustrating our final point, that qualitative analysis of how we are relating with the children is indispensable to the provision of child-rearing support for children with developmental disorders.

Jpn. J. Med. Psychol. Study Infants, 13 (1): 29-39, 2004

Key words : autism, primitive communication, primitive perception, relationship disturbance

はじめに

これまで人間発達やその障害は「個体（個人）」を中心に考えられ、「（養育）環境」はあくまで副次的なものとして取り扱われてきた。しかし、昨今、「個人」の究極的な次元とも言える遺伝子研究が進むにつれ、皮肉なことに「環境」の重要性がより一層浮かび上がりつつある。さらには、2001年WHOで決定された国際生活機能分類（ICF）では、障害は個人と環境の相互作用の結果の産物として、明確に位置づけられるようになった。今日、「個人（素質）」と「環境」がどのように相互に影響を及ぼし合いながら発達（障害）がもたらされるのか、その実態を明らかにするための新たなパラダイムが求められている。

これまで発達障害に対する育児支援は、子どもに見られるなんらかの発達上の遅れや歪みなどの障害を評価し、その結果をもとにいかにしてその障害を軽減していくか、あるいは環境を調整していくか、という観点から考えられてきた。われわれは発達障害と言われる子どもたちに認められる臨床像を個体という閉じられた中で生まれたものではなく、彼らと直接的に関わるわれわれ（養育者、療育者、教師、保育士など）との関係の中で捉えることを通して、彼らへの支援のあり方を模索している。われわれがこれまで10年あまりにわたって実践を蓄積してきた関係発達臨床の立場から、発達障害と

わけ自閉症に対する育児支援について論じてみたいと思う。

事例 A男 1歳8カ月

まだ発語はなく、歩くことができない。精神運動発達遅滞をともなった自閉症児である。

関係支援開始直後、A男は、Mother-Infant Unit (MIU) で、床にころがっているたくさんのボールを手で扱い、ボールが動くさまを見つめながら追いかけることに夢中であった。周囲の大人の存在にはまったくといっていいほど関心を示さない。A男の動きが止まったときに、母親が煩ずりしようとして近寄ると、顔を背けて母親に背中を向けてしまい、ふたたびボールに夢中になって動き回っていた。

関係支援が始まってしばらくは、そんな自閉的行動が目立っていたが、少しずつ周囲の大人の存在に関心を向けてくるようになった頃であった。女性援助者が彼から背を向けて床にすわっていると、おもむろに背中を彼女に向けながら、後ずさりするようにして近づいてきた。こちらに関心を向けて相手をしてもらいたいのかなと気づいた彼女は、すぐに方向を変えて彼の前まで回って相手をしようとして移動した。すると、彼はすぐさま反対方向に回転して彼女に背を向けてしまった。

関係支援開始直後のあるセッションで、A男ははいはいしながら、MIUに置いてあった「パンチング・ドール（起きあがり小坊師）」

(図1)のそばに寄っていった。そばで付き合っていた母親は、相手をしようとしてそれを思わず手で何度か押して左右に揺らした。するとA男はひどく怒り、手でそれを押さえてじっと「パンチング・ドール」の裏面を眺めていたのである。そこには注意書きの文字とマークが記されていたが(図2)、A男はそれに魅入っていたのであった。



図1 パンチング・ドール

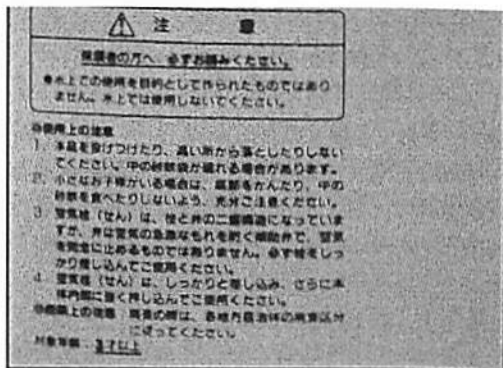


図2 パンチング・ドールの裏面に記載された文字やマーク

母親と子どもの対象への関心のずれ

母親が「パンチング・ドール」を思わず手で押して揺らしたのは、きわめて自然な振る舞いである。その玩具はまさにそのようにして遊ぶように作られているからである。通常、身の回りにある物には制作者の意図が反映され、その

物にどのように関わるかは暗黙のうちに規定されている。だから母親が行った振る舞いは至極当然のことであった。しかし、A男のその物への関わり方、着目の仕方は明らかに異なっていた。彼にとって、そのときのそれは「パンチング・ドール」という玩具ではなく、記された文字やマークそのものだったと言ってよい。このような親子のある対象に対する関心や興味の向け方がずれることは決して珍しいことではなく、ほとんどの場合このようなずれを日々蓄積しながら、日常生活が営まれている。ここに自閉症の言語認知問題の核心的な部分が潜んでいると思われる。

事例 H男 2歳1カ月(その1)

高学歴で独身時代は海外で通訳をしていたインテリの母親。夫との関係は緊張が高く、うまくいっていない。育児をひとりで担うことに対する負担感が非常に強い。

MIUでの初期の母子関係の特徴

初回、H男はMIUに入室するといろいろな玩具に目移りしてしまい、落ち着きなく次々に他の玩具を扱う。ひとつのものに集中して遊ぶことはない。ビデオカメラの動く音にとっても敏感に反応し、耳を塞ぐほどであった。つま先立ち歩きが印象的で、自己回転運動も見られる。床に寝転がって玩具を扱うときには、斜め越しに見ている(自閉的視行動)ことが多い。

第5回。H男は机の上にあった電車を取りだしてトランポリンの上に並べ始める。ついで、机の上の他の玩具にも興味が惹かれたのか、手に取りだした。その中でもとくにトーマスの電車(図3)が気に入った様子であったので、共同援助者(MIUのスタッフ)がH男の方に向けて電車を走らせると、彼はじっと目で電車を追っていた。それを見ていた母親は「Hちゃん(電車の)動かし方見た? ああやってみようよ」とH男に声をかけた。H男はそのことに興味があるわけではないので、母親の働きかけにはことさら応答せず、さらに自分で電車を

手にとって走らせようとした。しかし、母親はどう扱って遊ぶか、その遊び方を教えたくて、彼の手をとって教え始めた。そのとき、H男は黙って抵抗することなく、母親に手助けしてもらいながら数回走らせたが、すっかり電車に対する興味をなくしてしまった。

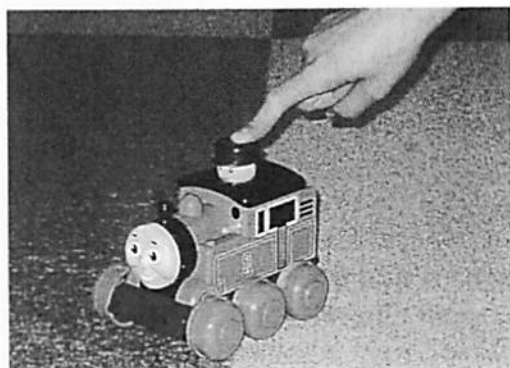


図3 トーマスの機関車（頭を押してはなすと動く）

典型的な自閉的行動が顕著に認められる子どもでもある。ただ、彼の行動特徴を自閉症だからといった捉え方をしてよいのであろうか。関係の特徴から眺めてみると、まったく異なった様相が捉えられる。母子間に見られる気持ちのずれが浮き上がってくる。

ここで認められた母親の子どもへの働きかけは、さほど珍しいものではない。母親は子どもに玩具の扱い方を教えようとしているが、H男はこの玩具を前にして「いま、ここで」どのような興味や関心を向けて遊んでいるのであろうか。H男は電車が動き出したという変化にいたく心を動かされたことは容易に想像がつくが、母親にはこの玩具の扱い方を教えてやりたいという思いが先立ち、H男の思いを感じ取ることができていない。そして母親の働きかけに対して回避的反応を示していることがわかる。その場での子どもの自発的な行動や気持ちの動きに対してうまく同調していないがために、このような母親の働きかけはH男の回避的行動を誘発しているのである。

事例 H男（その2）

先と同じセッション。クルクルスロープの車を見つけて、クルクルスロープ（図4）で走らせてみたところ、それがおもしろかったのか、カゴの中から次々と車を見つけてスロープに転がし始めた。そのとき、母親はそばで付き合いながら「Hちゃん、今度は赤だね」「あっ、（今度は）青色だね」と熱心に声をかけていた。するとまもなくH男は他のことに関心は移っていった。

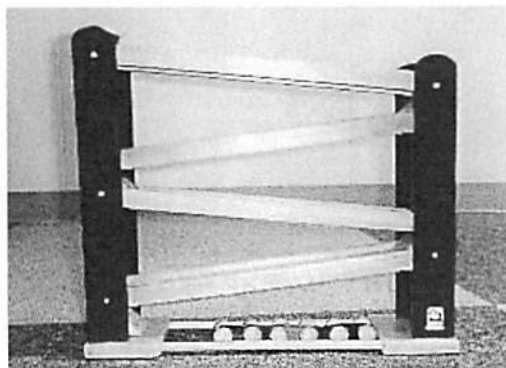


図4 クルクル・スロープ

事例 J男 3歳4カ月（その1）

些細な変化にも敏感に反応してパニックを起こす男児で、話しことばはいまだ見られない。母親はとても優しく、熱心にMIUに通っていた。とても受容的な母親であった。

4カ月後（第14回）

J男がヘリコプター（図5）を手にとって上に挙げて飛ばしている。〈ヒコーキ〉と言いながら楽しそう。母親は「それはヘリコプターって言うんだよ」と丁寧に答えてやった。さらにJ男が母親につきあってもらいたそうにしているから、ヘリコプターをさらに高く掲げて飛んでいるさまを演じていると、J男は急速に冷めてしまうのか、さっと回避的行動をとってしまう。

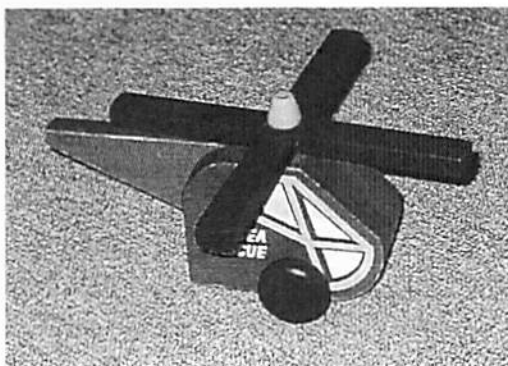


図5 ヘリコプター

ある対象への関心の向け方に見られる母子双方のずれ

H男の母親に限らず、われわれ大人は身の回りにある多くの対象に対してなんらかの意味を持ったものとして捉え、扱ったり、関わったりしている。そのことは認識（認知）と言われる心の働きを示しているが、われわれ大人は他者との共同生活を営む中でいつの間にか身の回りの対象が持つ意味を暗黙のうちに把握している。

玩具の車を見ると、「車」だとすぐにわかるし、いくつかの色の異なった車を見ると、「青（の車）」「赤（の車）」というように、色の違いに注意が向けられる。このようなことは、通常われわれのもの認識のあり方そのものの特徴を示しているのであって、それ自体を取り上げて、問題視しようとしているわけではない。しかし、このとき、H男は「赤の車」や「青の車」をどのように捉えていたのであろうか。車の色に関心が向けられていたのか、それとも車がスロープを駆け落ちるさまに吸い寄せられていたのであろうか。それとも……。確かなことはわからないかもしれないが、このとき彼の関心は車の色に注がれていたのではないということだけは確かなことのように思われる。

J男の場合、彼は「ヘリコプター」を手にとりて空中に向けて飛ばしながら、飛行機と自分が一体になったような気持ちで動くさまに気持ち

が惹かれていたことは容易に推測することができよう。従って、彼がここで〈ヒコーキ〉と表現していることの真意は、空中を飛ぶものでも言ってよいような意味内容を指しているのであろうが、母親は厳密に「それは飛行機ではなくて、ヘリコプターだ」と正そうとしている。ここでも同じ対象に対して子どもと母親とでは関心の向け方、捉え方に大きなずれが生じていることはわかるであろう。いわば理性的に考えようとする母親と、感性的な捉え方をしている子どもとのあいだに生まれやすいうずれである。

このようなエピソードを見ていくと、ことばにまつわる問題の所在がどこにあるかをわれわれに気づかせてくれる。それは何かと言えば、子どもとわれわれとのあいだで起こりやすいコミュニケーションのずれがどのようにして生まれるかということである。ことばに関わる問題とは、対象（物や人物）の認識のあり方そのものを意味していると思われるからである。

対象の意味はどのようにして規定されるか

われわれは通常ある対象を捉える際に、一義的なものの捉え方をしてしまいがちである。たとえば、「パンチング・ドール」を前にしたら、これはパンチング・ドールだね、「ボール」を前にしたら、これはボールだね、などと。身の回りにあるさまざまな対象は、このようになんらかの意図を持って作られたことによって、あるいは扱う人がなんらかの意図を持って関わることによって初めて一義的に規定される。われわれはお互いにそのような共通認識のもとに日常生活を送っている。通常はこのようなことを意識することはほとんどないが、われわれはある対象を何々であると認識する際には、暗黙のうちに対象を他の人々と同じように捉えるということを経験的に身につけている。このことは共同主観とも言われるものだが、共同体の中で相互に共通のある気持ちや思い、または価値観を分かち合っていることを意味している。

従って、あるひとつの対象を何々であるとい

う共通の認識を持つためには、単にその対象が何であるということばかりを覚えれば事足りるものではなく、その対象のどこにどのように着目し、どのように扱い、どのように関わるかという体験そのものをも踏まえたものでなくてはならない。そのような体験は乳幼児期からの養育者らとの交流を通していつの間にか身につけていくものであって、そのような体験の蓄積があって初めてことばが生きたものとして子どもにも身につけていく。ことばに関わる問題とは、このような共通認識がどのようにして生まれていくのかを考えることでもあるのだ。

しかし、自閉症の子どもたちはことばを獲得する際に、特別な困難さを持っている。それは、単にことばの学習能力が劣るというような表層的な問題ではなく、ことばの獲得過程そのものに潜む問題として捉えなくてはならない。

対象と属性

ひとつの対象はさまざまな性質を持っている。めがねであれば、大きさ、色、形、重さ、触感、材質、用い方など。このような性質を属性と言うが、その対象が何々であるという意味づける際には、その対象に備わったいくつかの属性に着目して初めて可能になる。逆に言えば、着目する属性が異なれば、その対象の意味は異なってくるということである。たとえば、ここに「机」があったとしよう。いつものように椅子に座って書き物をする際には、たしかにそれは机であるが、椅子がないので仕方なくその「机」の上に座ったならば、そのときのそれはその人にとっては「椅子」であって、「机」ということはできない。すなわち、ある対象が何を意味するかを客観的にあらかじめ規定することはできないということである。

先の例からもわかるように、自閉症児がひとつの対象に向ける関心のあり方は、われわれのそれとはかなり異なっていることが多い。

ものの見方を押しつけられる体験

自閉症の言語認知障害の問題は、これまで多くの研究者の注目を集めてきたが、関係発達臨床の視点から再度捉え直してみると、問題の本質がかなり見えてくるように思う。それは、われわれのものの見方を普遍的なものとして捉え、子どもたちに教えていこうとする考え方の中に潜む危険性あるいは問題である。対象の持つ意味はけっして一義的あるいは普遍的なものではなく、対象と関わる主体がいまどのような気持ち（関心、興味）を抱き、関わっているか、つまりは文脈に強く規定されているということである。とするならば、われわれのものの見方を彼らに押しつけていくことが、彼らにとってどのような体験として記憶され蓄積されていくか、ということ徹底して検討していく必要性が生まれてくるのである。

事例 J男（その2）

母親はこれまでJ男に対してどのように関わったらよいか戸惑いながら、子育てをしてきたが、その負担感は非常に強いものがあった。さらにJ男の状態もあって、周囲の人たちに大変気を遣っていた。そのため、J男が何かすると、すぐに周りの大人がどのような反応をしたか、気になってしまうという。そのようなことも手伝って、子どもはしっかりしつけなくてはという母親の思いがひしひしと筆者には感じられた。

治療開始からしばらく経過したところのあるセッションでの一場面である。J男と母親とのあいだで緊張が持続しているために、母親と遊びながらも、J男にはどこか回避的な傾向が続いていた。しかし、J男の行動全体にどことなく甘えたそうな、なよなよとした身体の動きが感じられた。J男は箱の中にあっただいもんなどの玩具の中から「ガラガラ」を取りだして、本来手で握る方の柄の先を口にくわえようとした。すると母親はすぐさまその「ガラガラ」を取って、上下を逆さにして、柄の方を持ちながら、手で振っ

て見せて「ガラガラだね」とJ男に語りかけた。するとJ男はすぐに他のことに興味が移ってしまった。

世間の目、常識の目

当時、J男はMIUに来るときに、おむつをつけていた。外でおしっこをもらしでもしたら他人に迷惑をかけるからとの母親の心配からであったが、このことと先の場面とを比較したとき、とても気になった。その頃、J男の排泄の自立はほぼ達成されつつあったが、母親の不安が強かったのである。

J男におむつをつけることは、母親がJ男を「赤ちゃん扱い」していることになるが、先の場面では、「ガラガラ」をJ男が口にしゃぶろうとしたら、それを取り上げて本来の「ガラガラ」を扱うようにして音を鳴らして見せた。口の中にしゃぶろうとする行動こそ、まさに「赤ちゃんのような」行動であるが、それに対してなぜか母親は手に持ち替えて音を鳴らして見せたのである。

母親がJ男におむつをつけさせていたのは、世間の目を気にしていたためであることは容易に推測できようが、「ガラガラ」を思わず本来の持ち方でもって扱って見せたのも、世間の常識的な見方を反映したものである。ここでわれわれが学ぶ必要があるのは、けっして母親の関わり方を問題視することではなく、われわれが子どもに関わる際に、いかに世間の目や常識的なものの見方に囚われやすいかということである。

親子に見られる両義的な気持ち

さらに大切なことは、ときには親の意向で「赤ちゃん扱い」をし、ときには「赤ちゃんのような」振る舞いを止めさせようとするところである。いつまでも赤ちゃんのようにかわいい子であってほしいという思いと、一日も早くなんでも一人でできるようになってほしいという思いは、子育てをする親であれば、ともに抱い

ているものである。親が子に抱く両義的な気持ちである。よって、J男の母親に見られる行動の矛盾は、さほど珍しいことではないだろう。ここで問題としたいのは、J男のそのときの「いま、ここで」どのような気持ちであったのか、その気持ちに沿った対応、すなわちより望ましいコミュニケーションづくりということを考えた際に、どうなのかということである。

子ども自身も、「赤ちゃんのように」になりたい、甘えたい気持ちになりたいときと、ひとりで何でもやりたいときがある。つまりは、親子ともに相反するような(両義的な)気持ちのあいだで、大きく揺れるのは、至極当然なことなのだが、親子のコミュニケーションという観点からすれば、子どもが甘えたい気持ちのときに自立を促し、子どもが一人でなんでもしたいときに赤ちゃん扱いするとすると、両者間のコミュニケーションは大きなズレを生むことになる。このことがのちのち深刻な問題となるのである。

愛着関係の成立と関心や意図の共有

筆者らの実践している関係発達支援では、子どもたちと養育者とのあいだに、どうすれば望ましい関係、すなわち「甘える-甘えられる」関係(愛着関係)が生まれるかに焦点を当てていく。その結果、両者のあいだで望ましい関係が生まれていくと、子どもの認識世界は大きく展開していくことが期待されるのである。

事例 J男 (その3)

6カ月後(第20, 21回)

J男は母親と一緒に遊びながら、心の底からうれしそうに振る舞っている。J男のやろうとしていることに対して、母親は適切にその面白い瞬間を際立たせて、その場にふさわしい語りかけができるようになっている。

ボールを滑り台からころがして落とす遊びをくりかえし始めた。そのときJ男は同じ色のボールを意識して手に取りころがしていた。明らかにJ男の関心はボールの色に向けられて

いたのである。そこで母親は「きいろ、おちたね」「あかときいろ、おちたね」などうれしそうに声を弾ませて声を掛けている。それがJ男にとってはとてもうれしらしく、なんどもみんなと顔を見合わせ、うれしさを共有できたことによってさらにうれしさが倍増している様子であった。

ここでは子どもの意図を母親がごく自然に映しだしていることがわかるであろう。それがJ男にとってはうれしくて仕方がない様子である。さらに興味深かったのは、一度母親がボールの色を間違えたとき、J男は怪訝な表情を浮かべたが、すぐに母親が正しく言ってくれたことによって、うれしさがこみ上げてきたのか、その前よりも一層うれしそうに反応していた。

さらに驚かされたのは、J男が滑り台(図6)の下に潜ったのを見て、母親はすぐに「さんかく(三角)」「しかく(四角)」などと、滑り台の階段を支えている柱が組み合さった形を見て、盛んに話しかけている。母親自身の遊び心が豊かになってきたためであろうか、周りの対象の中にさまざまな形を発見してそれをJ男に語っている。

その後間もない頃、MIUに通うために小田急電車に乗っていて、ドアガラスに張られていた指を挟まないための危険防止の丸いステッカー(図7)を眺めていて、ステッカーに描かれた指と自分の指を重ねて<サンカク>と言いなが

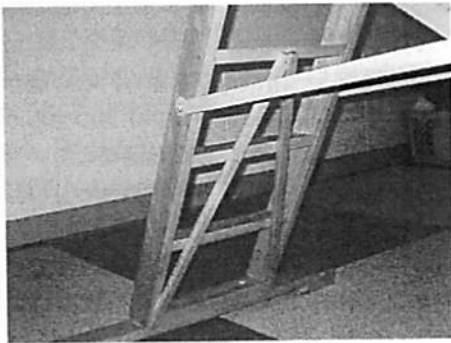


図6 (下方からみた) 滑り台



図7 電車のドアに貼られたステッカー

ら、母親に嬉しそうに話していたというのである。このエピソードの背景には、先のセッション中に滑り台の階段の添え木の形を見て、母親がこれは「三角」と教えたことが念頭にあったのだと思われるが、母子ふたりの子どもらしい体験世界を分かち合っているほほえましい姿とすることができようか。

このころになると、母親は子どもの気持ちが何にどのように向けられているのかがとてもよくわかるようになってきている。このように意図が分かち合えるような関係になると、母親が語りかけることは子どもの今の気持ちをさらに揺れ動かすほどの力を持ち、遊びはますます楽しいものになっていることがわかる。

さらに心動かされるのは、後半に示されているエピソードである。母親はJ男との遊びが心底楽しいものとなってきたのであろうか、滑り台の添え木の重なり合いの中にある形を発見し、それを思わず口にしてJ男に語りかけている。このときの母親には子ども心が蘇り、子どもと同じような気持ちで遊んでいたのであろう。そのためこのときの母親のことはJ男の脳裏に深く焼き付いていたことが後のエピソードで明らかになっている。つまり、電車に張られていたステッカーの中にJ男も同じ形を発見して、それを誇らしげに母親に報告し、母子で同様の体験の喜びを分かち合っている。

子どもの体験世界とそれにふさわしいことば 事例 J男 (その4)

22カ月後

最初の頃には比してはるかに母親との関係は安定し、抵抗なく母親に甘えるようになっていた。この頃には母親の語りかけることばを盛んに取り入れるようになってきていた。そんなある日のことであった。

母子一緒に外を歩いているときに、台風一過でその日はかなり暑かった。歩いていると、ふとJ男が「サムイ (寒い)」と言った。母親はこの数日と比べても暑いと感じていたので、思わず「暑いよね」と言い直して応答した。すると、またJ男は「サムイ」と同じようになりかえして言った。そこで母親はなぜ彼は「サムイ」と言ったのだろうかと考えた。まもなく、J男はビルの日陰に入ったときに「サムイ」と言っていることに気づき、なるほどと感心したという。この頃になると、このような母親の気づきがよく報告されるようになり、母親はJ男の発することばの意図を随分と的確につかむことができるようになっていた。

J男の発したことば「サムイ」の意味に母親が気づいたことによって、ここでの母子コミュニケーションはとて心地よいものとなっていったであろうことが想像される。このエピソードに示されたJ男のことばの使い方は、われわれの常識的なことばの使い方からすると、一見戸惑いを覚えるが、子どもの視点に立って考えれば、違和感を覚えるどころか、逆に子どもらしい独特な視点でことばを捉えていることを教えられ、なるほどと感心してしまう。

ここで大切なことは、母親がしばらく考えてJ男の言わんとしたことばの意味内容を、その場の状況からすぐさま察することができたことである。その日は確かに暑かったが、ビルの日陰に入るとひんやりとした涼しさを感じさせたのであろう。そのような微妙な気温の変化を敏感に感じ取ったJ男は、その体験を「サムイ」と表現したのである。

これまで自閉症の子どもたちと養育者との間でのコミュニケーションにどのようなずれが生じやすいか、具体例を交えながら述べてきた。ここで示した例を見れば明らかなように、ここで認められるずれは、けっしてある特定の養育者に認められる病理的な関わりによって生まれたようなものではなく、コミュニケーションの構造と深く関連したものであることがわかる。

そこでわれわれの社会性の発達とコミュニケーション構造とあいだにどのような関連性があるかを考えてみることにしよう。

コミュニケーションの両義性とコミュニケーションの広がり

われわれ人間は生まれてしばらくは、絶対的な存在としての養育者とのあいだで特定二者間コミュニケーションの世界で生きている。成長とともに、次第にコミュニケーションの相手は広がり、ついにはわれわれのような不特定多数を相手とするコミュニケーション世界で生きることになる。

ここで重要なことは、生誕直後の特定二者間コミュニケーションの世界とはどのような性質を持ったものかということである。これまで筆者が強調してきた情動的コミュニケーションそのものであるが、これはコミュニケーションの原初的形態を意味することから原初的コミュニケーションと称することができる。そこでは当事者双方の情動が直接的に共鳴し合うような世界である。それを可能にしているのが、原初的知覚様態という未分化な知覚様態である。

その後、社会性の広がりとともに、コミュニケーションは象徴機能を有する話しことばや身振りを駆使したものへと変容を遂げていくことになる。そこではことばの意味 (字義性) が殊の外重視されていくようになる。このようなコミュニケーションの変容過程はコミュニケーションの広がり、つまり社会性の発達によって必然的にもたらされるものである。

このように社会性の発達とコミュニケーション

ンの両義性（情動と字義）は密接な関連性を持っている。社会性の発達初期段階である乳幼児早期では、コミュニケーションの中で使用されることばの持つ情動的な面（相貌性）の果たす役割がきわめて強く、コミュニケーションはその情動性に強く規定されている。しかし、その後の社会性の発達につれて、次第にことばの持つ意味的な面（字義性）が大きなウェイトを占めるようになっていくとすることができる（図8）。

コミュニケーションの広がりとは知覚機能の分化

先に原初的コミュニケーションの世界では原初的知覚様態が活発に機能していることを述べたが、コミュニケーションの広がりとは知覚機能とあいだにも深い関連性がある。われわれ大人の知覚機能、とりわけ視聴覚機能は特異的に高

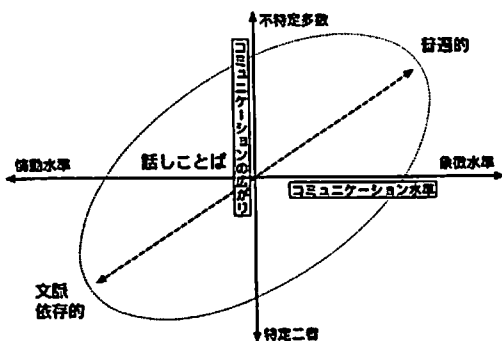


図8 コミュニケーションの両義性と
コミュニケーションの広がり

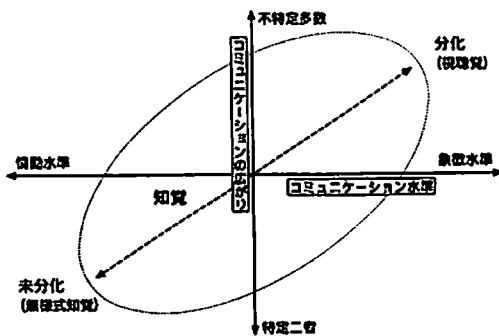


図9 コミュニケーションの広がりとは知覚機能の分化

度な分化を遂げているが、そのことによって複雑なコミュニケーションが可能になっている。このようにコミュニケーションの広がりとは知覚機能の分化は密接に関連している（図9）。

原初的知覚様態

以上、コミュニケーションの広がり（社会性の発達）とコミュニケーション構造あるいは知覚機能との間には密接なつながりがあることを指摘してきた。このように考えていくと、自閉症の子ども達とわれわれとのコミュニケーションにおいてずれを生みやすいのは、自閉症の子ども達が原初的知覚様態に強く依拠しているその一方で、われわれは高度に分化した知覚様態に基づくコミュニケーション形態をとりやすいところにあることがわかるであろう。つまり、自閉症の子ども達とわれわれとのコミュニケーションが容易に成立しがたいひとつの大きな要因は、われわれ自身のコミュニケーションが意味的世界に囚われやすいところにあると言えるであろう。

このように考えていくと、自閉症に見られる独特な知覚様態の活発な働きは、特定二者間コミュニケーションの成立そのものの困難さと不可分な関係にあるとみなすことが理にかなっている。われわれ子どもを養育する者が、ことばの字義性に強く依拠したコミュニケーションに偏りがちであるのは、けっして当事者自身の問題として矮小化することはできず、われわれ自身の知覚機能そのものの高度な分化に規定されているという一面を見逃すわけにはいかない。そのことと同じように、自閉症の人々では、彼らの原初的知覚様態が優位に働くがゆえに、必然的にわれわれのことばの持つ情動性（相貌性）に敏感に反応するということになる。自閉症の人々とわれわれとのあいだで生まれやすいコミュニケーションの問題は、知覚機能という生物生理学的基盤に深く根ざした問題として捉え直す必要があると思われる。

母子の関係発達支援の要点

ではわれわれは自閉症の子ども達に対する育児支援においてどのようなことを心がけていけばよいのでしょうか。具体例に端的に示されているように、養育者が子どもの心の動きを感じ取りながら、それにふさわしいことばを投げ返していくことであるが、このことは、養育者と子どもとのあいだで双方の気持ちが響き合う関係、すなわち「甘える-甘えられる」関係（愛着関係）の成立によって初めて可能になっていく。

われわれは日常のコミュニケーションにおいて大きく依拠している世界と子ども達のコミュニケーション世界、すなわち原初的コミュニケーション世界とのあいだを柔軟に行き来しながら子ども達と関わり合うことが大切である。このことは決して自閉症の子ども達の育児支援のみに当てはまることではなく、育児支援すべてにおいて最も大切なことである。その意味では自閉症の子ども達の育児は決して特殊なことをすることではない。ただ、彼らの育児には多大な困難さと忍耐が必要であることは間違いのないことのように思われる。

おわりに

発達障害、とりわけ自閉症の子ども達の育児支援は、自閉症の障害の本質を踏まえて考えていく必要があるが、ここではわれわれの依って立つ関係発達臨床の視点から自閉症の子ども達と養育者とのコミュニケーションにおいてなぜずれが生まれやすいのかを、コミュニケーション構造との関連性でもって論じた。

本稿は第12回日本乳幼児医学・心理学会(2003.10.25.山口県立大学)で開催されたシンポジウム「発達障害の育児支援」において発表した内容に若干の加筆修正を行ったものである。本稿では紙幅の関係で十分に述べることはできなかった部分については、小林(2004)を参照していただければと思う。

シンポジストとして発表する機会を与えていただきました林 隆会長(山口県立大学看護学部)に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 小林隆児 (2004). 自閉症とことばの成り立ち-関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界-. 京都, ミネルヴァ書房.